

ことはなかつたであらうと思ふ、さて彼等のかかはるところはこんな有様で人生のこと殆んど關せぬ處はないと云ふてもよい、そうして茲に注意すべきは一般の人々が彼等に對する態度如何である、自分はこゝにカルピニの言葉をかりて間接ながらその有様を見ようと思ふ、「蒙古人は占卜、呪文、巫術等を尊敬すること極めて厚く巫の言ふ所は神の言と信じて居る、神は之をイトガと稱へ其畏敬する有様は實に驚嘆にたえない、種々の食物を調理して之に供へ、且つ必ずその初餉を捧ぐる、そうして彼等の動作は一に此神の宣示するところによりて行はれる云々」と、神を尊敬すること此の如き有様であるから神意を傳ふる巫人を尊敬する様も大抵は想像することが出来るであらう、彼等の携はるところ彼等の尊敬をうくるところ前述の通りであるからこゝに彼等の社會的勢力の如何を注意せねばならぬ、何れの書物を見ても特にこのことに言ひ及ぼしたものを見ない、けれども社會の潜勢力として彼等の位置は實に重大なものがあると思ふ、彼等の一言は當時能く人の生命を支配したからである、彼等の意に逆らふとか、彼等の命令を用ゐないものとかは、忽ち彼等の恨みを買ふて早速例の神様を持ち出してその宣託として命を失はねばならぬからである、例を擧げて見るならば、彼等は物品の宮廷に獻ぜられて火の清めを施こすときに、そつといくらかづゝのコムミツションをとるのが常である、かつて立派な毛皮がある宮女に獻ぜられたときに、ふだんよりも餘計に之をむさぼつた、宮女について居る女が之を知つて宮女に告げたので、その巫人は大に詰責されたことがあつた、ところがその後此の宮女が病氣にかゝつたので巫をまねいて尋ねると、則ち呪咀による病氣であるといふて先きに自分を告訴した女を呪ひの當人に指名した、罪もない女はこゝに七日七夜の答をうけたが元來知らないことだから白状しない、するとこんどはふだんクリスト教徒の間に重望のある人の娘が人身御供に上げられて殺